

# 薬史レター



第55号

日本薬史学会

JSHP

2010年2月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局  
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

## 日本薬史学会 2010年の行事

4月よりの新事業年度を迎えるにあたり、下記の総会関連行事を開催致しますので、会員の皆様、万障繰り合わせの上御参集下さるようお願い申し上げます。

### 日時および場所

2010年4月17日(土) 東京大学薬学部総合研究棟  
12時30分～ 理事、評議員会 10階大会議室  
14時～ 総会 2階講堂  
15時～ 公開講演 2階講堂  
「日本薬史学会創立から50年のあゆみ」  
川瀬 清(日本薬史学会理事)  
「麻薬を科学する—モルヒネの移り変わり」  
兼松 顕(九州大学名誉教授、前名城大学学長)  
18時～ 懇親会 山上会館 (会費¥4,000)

### 秋の年会の予定についてのお知らせ

日程 11月13日(土)  
場所 東京理科大学神楽坂校舎1号館講堂  
年会長 海保 房夫(東京理科大学薬学部准教授)

演題申込み締切日などについては次号に掲載

### 事務局よりのお願い

- (1) 平成21年度の会費未納の方は至急納入下さるようお願い致します。平成22年度の会費は会計年度(4月1日～翌年3月31日)が改まってから御請求申し上げます。
- (2) 薬史レターへの投稿をお待ちしています。薬史学会通信No.41に掲載されている「薬史レター投稿のヒント」を参照下さい。

## 東海地区特別講演会

日 時：3月22日(月)(振り替え休日) 13時30分～14時30分

場 所：名城大学名駅サテライト(Tel.052-551-1666)

名古屋市中村区名駅3-26-8 名古屋駅前 SIA ビル 13階

演 題：「伊吹山と飯沼惣斎」

岐阜薬科大学名誉教授、元学長 水野 瑞夫氏

## 日本薬学会第130年会での薬史学関係の発表

3月28日(日)～3月29日(月) 岡山市

・午前ポスター発表6題(会場 桃太郎アリーナ1階)

### 薬学史

28P-am470 大阪道修町における試薬業界の変遷(2)―薬種業から試薬業へ―

○宮崎啓一<sup>1</sup>、宮本義夫<sup>2</sup>、三島佑一<sup>3</sup>(<sup>1</sup>三栄化工、<sup>2</sup>くすりの道修町資料館、<sup>3</sup>四天王寺大名誉教授)

28P-am471 日向薬事始め(その9)日向出身の、華岡青洲及び賀川玄悦(賀川流産科)門下生とその周辺

○山本郁男<sup>1,2</sup>、宇佐見則行<sup>1,2</sup>、程炳鈞<sup>1,2</sup>、岸信行<sup>2,3</sup>(<sup>1</sup>九州保福大、<sup>2</sup>九州保福大薬QOL研究機構、<sup>3</sup>宮崎・富高薬局)

28P-am472 屠蘇散の起源と変遷に関する考察

○毛利千香<sup>1</sup>、御影雅幸<sup>1</sup>(<sup>1</sup>金沢大院薬)

28P-am473 21世紀になって医薬品広告に登場したキャラクターグッズ

○五位野政彦<sup>1</sup>(<sup>1</sup>東京海道病院薬)

28P-am474 平安時代に編纂された「医心方」に記述のある9種類の寄生蠕虫類に関する研究

○牧純<sup>1</sup>、有田孝太郎<sup>1</sup>、西岡茉莉<sup>1</sup>、藤井健輔<sup>1</sup>、山根さゆこ<sup>1</sup>、西岡麗奈<sup>1</sup>、関谷洋志<sup>1</sup>、玉井栄治<sup>1</sup>(<sup>1</sup>松山大薬医療薬学科)

28P-am475 生薬としての「玳瑁」

○多胡彰郎<sup>1</sup>、多胡潤<sup>2</sup>、柴田有里<sup>3</sup>、宮崎啓一<sup>4</sup>(<sup>1</sup>日ウミガメ協、<sup>2</sup>大経大院営、<sup>3</sup>長岡実業、<sup>4</sup>日薬史学)

・3月29日(月) 午前 口頭発表2題(会場 コンベンションセンターC-1会場 407会議室)

### 薬学史・薬学教育

29CI-am01 9:30 「緒方洪庵の薬箱(大阪大学所蔵)」由来生薬名から見る実地医療の考察

○島田佳代子<sup>1</sup>、道下雄大<sup>1</sup>、東由子<sup>1</sup>、廣川和花<sup>2,3</sup>、村田路人<sup>3</sup>、江口太郎<sup>2</sup>、高橋京子<sup>1,2</sup>(<sup>1</sup>阪大院薬、<sup>2</sup>阪大博、<sup>3</sup>阪大院文)

29CI-am02 9:42 教育の殿堂星薬科大学本館の辿ってきた道

○三澤美和<sup>1</sup>(<sup>1</sup>星薬大)

## 第 39 回国際薬史学会報告

日本薬史学会理事 辰野 美紀

2009年(平成21年)9月16日から19日まで、オーストリアのウィーンで第39回国際薬史学会が開催された。

学会の開会式は、9月16日の5時から、ウィーン大学本館の重々しく美しい講堂にいっぱいの会員を集めて始まった。まず、今年が没後200年を記念してハイドンの管弦四重奏の作品76の4番をオーストリア薬剤師会のトラウナー氏とその仲間三人の演奏に続いて、今回の学会長のオーストリア薬史学会会長でウィーン大学薬学部生薬学教室の助教授クリスタ・クレッター女史が開会を宣言した。次に、国際薬史学会会長のオリバー・ラフォント教授と、国際薬史アカデミー会長のミュラーヤンケ教授の開会の挨拶が行われた後で、ウィーン大学副学長やオーストリア薬剤師会などの来賓の挨拶があった。今回の記念講演は、ドイツのマールブルク大学薬史学教室のペーター・ディルク教授が「薬剤師と薬の歴史」と題して1時間あまりの講演を行った。内容は、特にウィーン学派前期と後期における薬剤師の活動が近代医学と薬学成立に与えた多大な影響についての詳しい分析であり、非常にレベルが高く教えられる点が多かった。

暗くなって、7時から、大学の中庭でオープニングパーティが開かれた。前々回のエジンバラの第37回国際薬史学会の時以来のなつかしい方々にお会い出来、近況を報告しあったり、名刺交換をしたり、明日の発表について話したり、自由で楽しい時間を過ごした。

17日から19日は、場所を旧医学部(それ以前は“ウィーン一般病院”が置かれていた歴史的建物)に移して、3会場での発表とポスターセッションが行われた。“ウィーン一般病院(Allgemeines Krankenhaus)”とは、ヨーゼフ2世によって1784年に創設された病院で、当時はパリのオテル・ドイュー病院に匹敵するベット数2000を誇る病院兼臨床医学教育施設であり、また、最新の病理解剖学研究所や円形の精神病院(Narrenturm)などを備えた巨大なものであった。すでにハプスブルク帝国では、女帝マリア・テレジアの時代に、オランダからブルーハーフェの門下生であったファン・スイーテンをウィーンに招聘し、彼に最新の臨床医学教育を行うウィーン医科大学を開校させると共に、数々の医療改革を行わせていた。息子のヨーゼフ2世は、ドイツから招いた社会医学者ペーター・フランクの助言に従って、帝国民の福祉を充実させる為にさらに多くの医療改革に着手した。この病院は、18世紀から19世紀にかけて、ヨーロッパの近代医学を先導したパリ学派と並んだウィーン学派と呼ばれる人達、例えばロキタンスキー、ビルロート、スコータ、ゼンメルワイス、アウエレンブルッガーなどの綺羅星のごとき医師たちが活躍した場所である。

さて、3日間の学会発表は、招待講演が5題。口頭発表は73題。ポスターセッションは、ドイツ語が12、英語が13、フランス語が5の計30題であった。

私の発表は、第1日目の11時30分から、発表10分、質疑応答5分であった。エジンバラの学会はすべての映写を、3枚同時併写であったので、ドイツ語と英語とフランス語の説明つきの映像を見ることが可能だったが、今回はアシスタントなしで自分でPCを操作しながら、発表を進めるシステムであり、少し、戸惑ってしまった。その上今回私は初めてのテーマとして、日本の医神と薬の神の少名彦名命を取り上げさせて頂いたので、更に緊張した。私が今回このテーマを選んだのは、以前、ドイツのマールブルク大学の薬史学教室の前任教授の故ルドルフ・シュミッツ教授の“世界薬学史”の第1巻に日

本の薬学史を書かせて頂いたが、そろそろ新しい知見を加えて、当時の内容を改訂しないといけないと考えていたからである。今回の私の発表のときの座長は、今年から国際薬史学会の副会長に前日に指名されたデンマークのポール・クルーゼ教授であった。彼には、前日のお昼に郊外の薬学センターの生薬学教室で開かれた各国の薬史学会からのデレゲートが参加して開かれた ICHP の会議でお会いしていた。私にとって、久しぶりの国際薬史学会の口頭発表だったが、なんとか無事終了することが出来た。座長から、日本の古代文化史における薬や薬祖神についてや、日本独自の衛生概念などを、次回も続けて発表して下さいと励まして頂き一息つくことが出来た。この時、日本薬史学会の小川先生に、私の発表時の写真撮影をしていただくなどお世話になった。

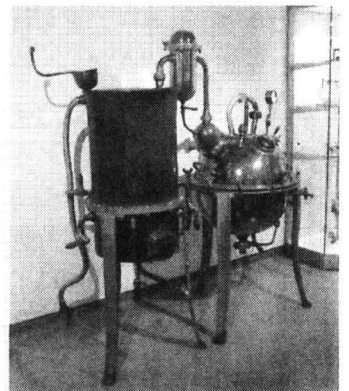
午後から、ハプスブルク家の王宮図書館の見学に参加した。ディオスコリデスなどの薬草書や手書きのガレノス製剤に関する解説書等等、膨大な貴重な書籍と文献を見せて頂いた。

夕食後、国際薬史アカデミーの総会が、昨日と同じ大学本館の講堂で開かれた。オリジナル研究が認められて新しくアカデミーの会員に認定された研究者の紹介と今年のジョウ・アーダング・メダルとマリア・カルメン・フランシス・メダルの表彰の後、今回の学会会長を務めたクリスタ・クレッター助教授の講演が行われた。テーマは、「18 世紀と 19 世紀のオーストリアの薬局」であり、古い歴史的な価値を持つ薬局や特に宮廷内薬局の処方と機器を大学の生薬学教室のコレクションとして収集していることも詳しく紹介された。

2 日目の 17 日は朝 9 時から、次回のベルリンでの学会長に決まったフリードリッヒ教授の招待講演が行われた。「薬学は国民福祉の為に役立っているのか？」というテーマで、DDR(旧東ドイツ)のベルリンの壁崩壊からすでに 20 年を経た今年に、その医薬学制度の功罪の総括を通して考えられる現在の問題点の分析と未来の展望について発表された。この日の多くの口頭発表の中で、私は 18 世紀と 19 世紀の薬局についての発表と、また、各国のコレラ流行時の薬剤師の活動について数報のまとまった発表があったのでそれを選んで聞いた。夕刻になって、大学前に用意されたバス 3 台に分乗して、郊外のホイリゲという自家製の白ワインの新酒とオーストリア料理を提供してくれる居酒屋に出かけた。日本からの参加者がなかったので少し不安だったが、アカデミーの元会長のマリア・カルメン・フランセス教授から、声を掛けて頂きスペインとイタリアのグループに入れて頂いた。彼女とは、エジンバラでも一緒にランチをとって顔見知りになっていただけだったが、その時セビリヤの学会(2007 年)に来るなら、マドリッドの大学の薬学史教室や中世史の研究所も見学させて下さると言って下さったことを思い出した。彼女は、薬学史研究を志す研究者に様々な助力を与える活動を続けている方である。。今回も親切に仲間に入れて頂き、お陰で楽しい夜を満喫できた。

3 日目の午前中は、スイスのフランソワ・レーダーマン教授の「ナポレオン時代からビスマルク時代までの薬学」と称した招待講演や、昨日一緒だったマリア・カルメン女史の「ルネッサンス時代の医師の治療薬について」の口頭発表などを聞いた。昼休みに、旧医学部に留学していた日本の医学者がウイーン大学に寄贈した日本庭園を見ることができた。午後から、閉会式が行われ、その中で次回学会の紹介ビデオも放映され

Antidotakasten.



Destillierapparat.

た。参加者と2年後の再会を約して握手をして別れた。大変、充実した3日間であった。

学会終了後の次の日の日曜日に、クレッター助教授の指導されている薬学部の生薬学教室が誇るアジアを含む全世界の生薬のコレクションを見学した。あまりに多い収集品で2時間の見学では、すべてを見たり質問したりするのに時間が足りないと感じた。コレクションについては、以前民族医学と生薬についての学会がウィーンで開かれたときに、これらのコレクションを中心に他にも詳しい論文を収めた冊子が纏められていることを聞いたので、月曜日にウィーン大学医学部の医学史研究所のある歴史的建造物”ジョセフィヌム(Josephinum)”“に行き、以前からお世話になっているマンフレッド・スコベック氏にそのコピーをお頼みし持ち帰る事ができた。今後、これについては、生薬学の専門の先生に内容を検討して頂きたいと考えている。



## 第39回国際薬史学会に出席して

日本薬史学会理事、ファーコスたちばな薬局  
小川 通孝

第39回国際薬史学会は2009年9月16日～19日、オーストリアのウィーンのウィーン大学で開催された。私はいつかは国際薬史学会に参加したいとの希望を持っていたが、今回ウィーンで開催と聞いてこれは絶対に行くぞと腹を決めた。その理由はウィーンが音楽の都であり、モーツァルト、ベートーベン、シューベルト、ハイドン、ヨハン・シュトラウスなどが活躍した楽都であり、クラシックファンの私にとってはまさに垂涎の都市だからである。

9月15日、10:40成田発のオーストリア航空の直行便でウィーンに入った。16:00ウィーン国際空港着。荷物もあることで、40ユーロを奮発しタクシーで、SUITE HOTELに入った。このホテルは、900M zur OPER と案内にある。OPERとは、国立オペラ座、パリ、ミラノと並ぶヨーロッパ3大オペラ座で、市の中心部にある。ホテルが市の中心部に近かったことは翌日からのウィーン大学への通学(学会出席)、音楽会、観光などに大いに利点となった。

国際薬史学会は9月16日(木)13時より開催された。ウィーン大学は、かつての城壁跡のリンクと呼ばれる環状道路に面している。トラム(市電)に乗って国立オペラ座から5つ目の駅で便利の良い処にある。ウィーン大学は1365年に創立されたドイツ語圏最古の大学で9人のノーベル賞受賞者を輩出した名門、本館は19世紀後半に建てられたルネッサン



ス様式の堂々たる建物である。

受付に登録を済ませると早々に、14時からの学会イベント、Tour1:「Historical pharmacies in the city」に参加した。これはウィーン市の薬局、特に興味のある建物、(バロック様式、アールヌーボースタイルなど)を巡るツアーで大変楽しみにしていた。オーストリア薬剤師会の Franz Biba 先生の案内で薬局6軒を訪問、建物も素晴らしいが室内の天井などに、キリスト生誕、マリア像、天使像などが描かれており実に見事なものが多かった。また、薬局内には、大小様々な装置瓶が並び、鎮痛剤、ビタミン剤、胃腸薬などが入れられている。医薬分業の長い歴史を実感した。但し、Biba 先生はじめ各薬局の薬局長の先生方の説明が全てドイツ語で聞き取れず、理解できないことが多くこれが残念であった。

17:00~18:30 Opening Ceremony で Dr. Peter Dilg(Germany)の特別講演、19:30より、大学のバケットホールでカクテルパーティーが開催され、ウィーンワインを堪能した。

翌17日(木)から一般口頭発表が始まった。会場は大学本館から徒歩で20分位の University Campus でこの広大な敷地の中に幾つもの講義室がある。ウィーン大学の広大さに感嘆する。

発表は、口頭発表84、ポスター発表30の計114であった。国別では、ドイツ25、スペイン12、トルコ8、フランス7、オーストリア7、イタリア7、ルーマニア7、ポーランド6、ハンガリー4、セルビア4演題など約30カ国から発表があった。次回に首都ベルリンで第40回国際薬史学会を開催するドイツの熱意を感じた。

日本からは、辰野美紀理事より「History of Medicine and Pharmacy in Japan」の演題発表があった。発表の概要は、大国宿命と因幡の白ウサギの 슬라이ドで日本古代の医療上の特徴、特に宗教上、けがれを除くことで健康を確保することと、その方策として薬草を使うことを説明、その後日本の医療技術の変化は、中国、韓国、近來ではヨーロッパの影響を受けて「there is a multiple medical system in Japan」とまとめている立派な発表であった。

18日(金)、19日(土)は午前、午後の適当なところまで口頭発表を聞かしてもらった。発表は英語だけでなくドイツ語、フランス語、スペイン語と多様であったが、スライドをしっかりと見て少しでも理解するように努力した。

今度のウィーン旅行のもう1つの目的は音楽を聴くことであった。

1. 国立オペラ座—「歌劇マダムバタフライ」
2. 王宮コンサート「モーツァルト、ヨハン・シュトラウス」
3. シェーンブルン宮殿オランジェリーコンサート「ハイドン、モーツァルト、シュトラウス一家」
4. 楽友協会—「ウィーンモーツァルト交響楽団、18世紀の髪型、衣装で演奏する。」

以上の4回のコンサートを聞くことができた。流石に音楽の都で、内容は素晴らしく、ヨハン・シュトラウスの作品が多く演奏されたが、「ウィーンの森の物語」の曲がつい口をついて出る位に楽しい気分が横溢するウィーン旅行であった。

## 日本薬史学会 2009 年会(金沢)に参加して

川瀬 清・小倉 豊

日本薬史学会 2009 年会在、同(平成 21)年 11 月 7 日(土)~8 日(日)の両日にわたり金沢大学(角間キ

キャンパス)の自然科学本館で開催された。

金沢は、江戸時代より「江戸・京・大阪と比肩する学問の府」と言われ、今日なお伝統文化と学問の城下町である。秋深まる紅葉の美しいキャンパスで、参加者一同、金沢独自の文化・学問と、優れた加賀藩の医学・薬学の歴史に触れることが出来た。

第一日は、まず、年会長・徳久和夫・石川県薬剤師会長による挨拶によって始まり、次いで、特別講演と一般講演(口頭とポスター)が行われた。

特別講演Ⅰは、石川県立歴史博物館の本康宏史氏による「加賀の奇才・からくり師、大野弁吉の医薬知識」と題するものであった。

この人、大野弁吉(1801~1870)は、加賀の平賀源内とも加賀のダヴィンチともうたわれ、一般に優れたカラクリ師と言われているが、実は多方面にわたる科学知識を身につけた技術者と言うべく、豪商・銭屋五兵衛の目に留まり、彼の援助もあって、弁吉の才能は如何なく発揮された。弟子も多方面にわたり、眼科医と共同して金沢初の望遠鏡・顕微鏡を作り、写真術に及び、また同地方最高の蘭学者・黒川良安と接して医薬・医療面でも活躍し、更に藩の海防・軍事政策にも関与した。

この特別講演では、彼の唯一の遺書「一東視究録、製薬上」によって、主として医学・薬学・化学に関する記述が紹介され、同時に関連する文書・絵図も配布された。ここでは、60種以上の医薬処方およびその製法・用法などが記されており、内容は実用的にも科学的にも高い水準を保っていた。

昼食を挟んで午後からは、特別講演Ⅱ・金沢大学名誉教授、板垣栄治氏により「スロイスとホルトマンの基礎医薬学講座」と題する、明治初期の金沢医学校での二人のオランダ医師の講義内容について講演された。

1871(明治4)年に始まったスロイスの医学講義は多岐にわたり、中でも舎密学においては、Miller, W. A. : Elements of Chemistry, Theoretical and Practical, London, 1864 を底本とした、当時としては最新の化学講義であった。注目すべきは、分子式や化学式の表記法が現在と同じであって、日本の近代化学の始まりについて、従来から言われていた「大阪・舎密局ではなく金沢・医学館であったのだ」と指摘された。



さらに1875(明治8)年からのホルトマンの有機化学の講義には、すでに、たんぱく質と酵素に関する記述が見られ、これらの新しいオランダ医学の教育により、1884(明治17)年には82名の医学生が卒業して、医師の免許を取得し、また金沢医学所・製薬学科からは9名の卒業生を輩出している。

以上の特別講演は、共に加賀百万石・金沢ならではのテーマと内容であり、同時に演者らの郷土に対する深い愛情を感知することができ、また、金沢の医学・薬学の歴史の深さを再認識させられた。

一般講演は、口頭発表9題、ポスター発表7題、計16題であった。学会の設営に当たっての困難は、一般発表演題申し込みの最終総数の確認である。今回の金沢においても同じであったであろう。しかし、多数になっても複数の会場を設けることなく、一演題の発表時間を短縮してでも、参加者一同が総ての講演を聞けるように配慮しようとして決められた。そして締め切ってみると、予想を上回った数字になってしまい、一部ポスター発表方式をとらざるを得ず、薬史学会年会初めての、苦心のプログラム編成をとることになった。ここに各発表の特徴を紹介すると;

L-1 三澤美和氏(星薬科大学薬理学)は今日まで一貫して、星一・同大学創始者の事績を追求されて来られ、今回は、かの二・二六事件(1936)後に就任した廣田弘毅首相との交友関係を調査・報告された。

L-2 柳澤波香氏(青山学院大・津田塾大)は、主として英国におけるアポセカリの歴史について研究され、今回は、ロマン派詩人J.キーツ(1795~1821)がアポセカリ試験に合格し、医業を開き、自ら患った肺結核の故もあって、詩が研ぎ澄まされてゆく過程を通じて、人と職業に迫る研究を報告された。

L-3 高橋春男氏(エーザイ(株)臨床センター)は、わが国1960年代に、サリドマイドや、アンプル

風邪薬・薬害事件に端を発した市販医薬品の安全性確保の課題が、その後医薬品の再評価問題に広がって半世紀が過ぎたことになり、この間の経過を歴史の目で確認された内容を報告された。

L-4 山本郁夫氏はじめ宮崎県延岡地区に研究フィールドを持つ会員が共同して、延岡藩の優れた医療環境について、今回、さらに多くの人材を発掘して報告された。

L-5 宮崎啓一氏ほか「くすりの道修町資料館」を訪問された方々の共同研究として、試薬業界の歴史について、その黎明期の様子について調査された結果を発表された。

L-6 佐藤知樹氏ら、日本医歯薬専門学校に結集されている会員の共同研究として、昨今の医薬品流通・販売の状況を踏まえ、現状分析とあるべき姿の関連を報告された。

L-7 成田研一氏(済生会病院・薬剤部)は「無名異(ムミョウイ)」と名付けられる鉱物薬が南北朝時代の薬物書に止痛・消炎剤として記載されているが、石見銀山からも同類鉱物の産出が日本の文献に記載され、高貴薬扱いされ、今後の研究を待つ旨報告された。

L-8 多胡彰郎氏(長岡実業(株))を中心とする集団が、古来より多用されているメントールについて、各方面からの最新研究成果を、総合的に検討された成果が発表された。

L-9 本稿執筆者の一人・川瀬は、福井県丸岡藩出身者・藤田正方が和漢・蘭英独の医学に精通し、医療・衛生の実務を推進する中で、薬系技術者養成の必要を痛感し、薬舗主(薬剤師)養成機関を創生した様子について報告した。

#### ポスター発表

P-1 石田純郎(中国労働衛生協会)氏が、近代医学史研究の一環として為された韓国近現代医療文化史関連の写真中より、医薬・薬事関連の写真について展示解説された。

P-2 奥田潤氏は、日本寺院における薬師像の中で、手に持っている壺(薬壺)とその中にある薬物を研究し、成果を発表されてきたが、この度、研究の手を仏教の故郷インドの医薬に伸ばされ、今回その第一歩について報告された。

P-3 赤沢学(金沢大学薬学系国際保健薬学)氏ほか、津谷東大医薬政策学教室では、日本における薬剤経済学評価関連の状況の推移について検討されてきたが、その大要についての話題を提供された。

P-4 荒井祐美子((財)日本医療情報センター)氏ほか、医薬品として上市されてきたアミノ酸製剤中、非天然型アミノ酸など組成の由来などを調べた結果について報告された。

P-5 田中玉美(名大文学専攻)氏は、ドイツ、ピンゲンのヒルデガルト(1098~1179)の時代は修道院が医療施設として存在し、必ず薬草園を持ち、日々の勤めの中で、病者の世話は重要な位置を占めており、当時一般的であった生命観・自然観と現在のそれとが意外に近似し、改めて現在の課題と対比できると述べられた。

P-5 伏見裕利(富山大和漢薬研)氏ほかは、生薬「滑石」の本質に着目し、これまであまり精査してこなかった物性学的検査の成績を発表された。

P-6 串田一樹(昭和薬大)氏は、恩師林一教授の下で理論的思考と実践の統一と言う発想を身に付け、所属する教室名に拘わらずに、各時点で薬学教員としての任務に邁進し、医療薬学が提唱されてからは実践課題を重視し、社会薬学分野の確立と発展に関与して来られた。以上の経過を時系列的に内省し、現在を薬学転換期と位置づけ、薬史学研究の場に問いを寄せられた。

このあと再び講演会場に移り、次期(2010年度)年会開催地を東京とし、東京理科大学が担当することとして、山川浩司会長、海保房夫・西谷潔先生がそれぞれ挨拶された。なお、会場は都内神楽坂とし、千葉県野田市ではないことも説明された。続いて御影雅幸金沢大学教授より閉会の挨拶があり、会場設営について新たに得られたノウハウなどの披露もあった。

次いで用意されたシャトルバスで駅前の懇親会場へ向かった。金沢都ホテルでの懇親会では、金沢ならではの山海珍味に迎えられ、会員間相互の交流を一層深めることができた。





五人扶持の松

## 「学都金沢医薬探訪」参加報告記

高橋 文

プログラム：09:30 金沢駅西口発～（福久屋石黒薬局）～金沢大学医学記念館～林鐘庵～12:00 着  
つば甚（昼食）13:00 発～13:20 金沢都ホテル着～金沢老舗記念館～（21世紀美術館）～（兼六園）  
～旧金沢医学館～湯本求真顕彰碑～（成巽閣）～（亀田屋）～15:00 金沢駅前着

11月8日(日)、晴天に恵まれ、9時に金沢駅西口で受付を済ませると、上記プログラムに従ってこれから訪ねる史蹟に関する資料入りのずっしりとした封筒を渡された。9時半、北陸大学シャトルバスにて出発、参加者は30名余、ご案内は北陸大学未来創造学部教授 長谷川孝徳先生。また時に応じて北陸大学薬学部教授 宮一論起範先生や年会長の徳久和夫先生のご説明があった。

武蔵ヶ辻を右折して百万石通りを行くと左手に、五代藩主前田綱紀から「御殿薬」の処方を書いた葉舗御三家の一つ、中屋跡(今は八階建ビル)が見えてくる。江戸時代から続く葉舗跡をバスの中から見学して、広阪通りを兼六公園下から小立野台に到着、大学病院前でバスを降り、金沢大学医学部記念館を訪ねる。まず医学部入り口で、富山県出身の蘭学者、黒川良安(1817～1890)の胸像に迎えられたあと、奥まった場所にある記念館1階の資料室に入る。ここには、第十四代藩主前田慶寧が慶応3年(1867)、金沢の東北卯辰山に北陸最初の西洋式病院、卯辰山養生所を創設、薬圃場と舎密局も付設された(金沢大学薬学部はこの時をもって発祥としている)その養生所から金沢医学館を経て金沢大学医学部に至る資料類他が展示されている。明治2年に黒川良安が長崎で購入し、当記念室保管の有名なキンストレーキは、現在修理のため搬出されていて見学できなかった。明治3年に開校された金沢県医学館で、近代医



スロイス



ホルトルマン



ローレッツ

薬学教育に携わった蘭医スロイス、ホルトルマン、ローレッツの大きな肖像写真が壁に掲げられていて、目を引く(その講義録は金沢市立図書館藤本文庫に收藏)。黒川良安の書状や中川淳庵あての書状、ドドネウス和蘭草木誌、解体新書、和蘭字彙等々江戸時代の貴重な図書類など主に医学関連の資料が豊富に展示されており、金大医学部十全同窓会の赤祖父一知先生のご説明を頂いた。

次に訪ねたのは、林鐘庵と呼ばれる北陸大学教養別館、その庭にある「五人扶持の松」を見るためである。卯辰山を借景に巨大な盆栽ともいえる樹齢450年の松は、藩政時代の前田家家臣、吉川家の庭に

あったものであり、十三代藩主前田斉泰は兼六園への移植を希望したが、枝先が長いので沿道の家 150 軒の移動が必要と分かり、斉泰も断念、いつまでも枯らすことなく手入れせよとこの松に五人扶持を与えたことからこの名がついたという徳久先生のご説明があった。高さ 7m、枝振りは南北 24m、東西 19m、かさの下は 100 坪に及ぶという風雅な中に威厳を備えた松を眺めて、高潔な加賀文化の流れにしばし浸った。

そこを後にして昼近く、寺町の料亭「つば甚」へ到着。ここには、前述の「御殿薬」拝領のご三家の一つ宮竹屋亀田薬舗の茶室が移築されている。亀田家は金沢目抜き通り片町で薬種商を業とした名家であり、文雅を好み茶道、俳諧なども極めた。茶人亀田是庵の弟は小春(ショウシュン)と号し、蕉風の俳人として知られており、松尾芭蕉は「奥の細道」で亀田薬舗に滞在して句会を催し、書を認めたという。明治に入って「つば甚」に移築されたという、おかみの丁寧な説明も聞くことができた。そのあと、4～5 人づつにじり口から入って茶室も拝見。優雅な空気にふれたあと、大広間で全員座って昼食を頂いた。

そのあとバスは 13:20 分に駅前都ホテルに到着、市民公開講座に出席する何人かの人たちはここで下車。次いで金沢老舗記念館を訪ねた。ここには藩政時代からの金沢屈指の薬種商で、五代藩主から御殿薬処方拝領した後、代々町年寄りもつとめた中屋家の薬舗の店舗部分があるまま移築され、展示されている。一階には薬舗の「みせの間」を復元した和室があり、奥に薬箆笥、店先に煙草盆や火鉢が置いてある。屋根の上に掲げられていた円形の大型看板、「官許 烏犀圃 混元丹 腎心丹」も置いてある。(“薬史レター第 51 号、「残念。加賀の秘薬 混元丹・烏犀圃が消えてゆく一家伝薬を守ろう」服部昭”を関連文献としてご参照下さい)。

つづいてバスは 21 世紀美術館を右手に見ながら進み、兼六園そばで下車。その西南部に位置する金沢神社境内にある湯本求真(1876~1941)顕彰碑を訪ねた。七尾市に生まれ、金沢医専卒の湯本先生は「東西医学の融合と統一」を提唱し、近代漢方医学復興の父と称えられた。門下生に大塚敬節、清水藤太郎等々がいる。

兼六園内には十二代藩主夫人の隠居所であった成巽閣があり、また前述の金沢医学館の遺構は兼六園内に移築され、現在兼六園・金沢城の管理事務所分室になっている。

ようやく帰路につき、ご三家の一つ、亀田屋の前を通り、その店舗の前にある円形看板「官許 者婆萬病園 紫雪 烏犀圃」は、江戸時代からつづく“本物”であるというつぶやきに耳を傾け、その重みをかみしめつつ、さらに徐行するバスの中から眺めた御三家の一つ、福久屋石黒薬局の重厚なたたずまいに深い感銘を覚えた。

15:00 金沢駅前着、五代藩主から御殿薬処方拝領した薬舗ご三家は薬種商として商業の発展に寄与したのみならず、茶道、華道、謡曲、俳諧など加賀文化にも大きく貢献したことなどに想いをいたし、その伝統をたどる素晴らしいツアーを終了したときは、優雅な想いに心がはち切れそうであった。

このツアーと並行して、金沢都ホテルにおいて『加賀藩と医薬』(13:30~16:00)と題する市民公開講座が開催された。石川県薬剤師会副会長 三浦智子先生を座長に二つ特別講演が行われた。一つは、金沢大学大学院医学系研究科特任教授 鈴木信孝先生の『“伝統薬に光”～アメリカで進む植物性医薬品(Botanical Drug)について～』であり、もう一つは石川考古学研究会 米澤義光先生の『加賀三味薬と



幕末・金沢図屏風に描かれた宮竹屋について』“である。これら特別講演の要旨は『薬史学雑誌 44 巻 2 号』に掲載されているので、ご参照いただきたい。

後記：金沢の年会は、二日間ともに北陸には珍しい好天に恵まれ、年会会長、実行委員会、石川県薬剤師会、金沢大学薬学部、北陸大学薬学部等の皆様のお世話により、予定通りに進行し、大変充実したかつ快適な時を過ごすことができた。参加者に事前に送付されてきた講演要旨集には、金沢駅から角間会場への案内やバス時刻表も添付されており、主催者の心配りと地方での開催のご苦勞を偲ばせた。心からの感謝を申し上げる。

## 五史学会(2009)参加記

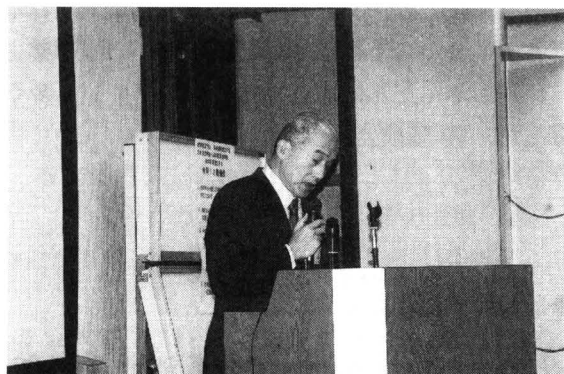
五位野 政彦

今年も「五史学会」(薬史学会、医史学会、歯科医師史学会、獣医史学会、看護歴史学会合同 12 月例会)が行われたので報告する。

この五史学会は医療に関わる 5 つの史学会が一堂に会し、それぞれの分野から一題ずつ研究報告を行うものである。各学会が年番で当番幹事を務めており、今年は獣医史学会が司会その他の業務を引きうけられていた。いろいろなお苦勞があったであろうが、無事終了したことに敬意を表する。

今年の会場は例年通り、順天堂大学医学部 9 号館 2 階 8 番教室で行われた。これからの医療を担う若い学生が学んでいるこの教室からは、彼らの意気を感じることができる。会場には約 90 名の参加者が集まり、来年などは補助席が必要になるのではないかとも思われた。参加費として 200 円を徴収している。

発表会場では時間制限のあるなか、司会進行である獣医史学会の先生方のご尽力により活発な討議も行われた。



この会には一昨年から看護歴史学会からの参加者もある。誤解を怖れないでいえば、研究発表会場に多くの若い女性研究者が参加していることが、この合同例会の雰囲気をもっとも前にさらけ出し、オープンなものにしているのではないだろうか。薬史学会においても、多くの若い研究者の会合への参加が得られれば、あるいは青いかもしれないが新鮮な空気がいささかでも流れるのではないだろうか。

前述の獣医史学会から深谷謙二先生の司会進行で下記 5 題の発表が行われた。

14 時からの前半は下記の 3 題である。

1. 葛原勾当日記に記載された疾患について

日本歯科医史学会 新藤 恵久

葛原勾当(くすはらこうとう)は江戸末期から明治にかけて活躍した生田流箏曲の名手で大正・昭和期の童話、詩人として名高い葛原しげるの父親。幼少時に失明したが、活字を使った日記を残しており、歯痛や義歯に関する記録が残されている。

2. 戦前の日本赤十字社看護人の救護活動 日本看護歴史学会 山崎 裕二  
看護婦(女性)の歴史は身近であるが、男性の看護人に関する記録にはあまり接する機会がない。  
日清日露戦争の時代を中心にした男性看護人に関する報告である。

3. 日本のワクチン受容史—ジェンナー博物館にて予防接種法を考える 日本医史学会 渡部 幹夫  
戦後、GHQ によりいくつかの予防接種が施行された。戦前からの感染症の罹患者数の推移、戦後における予防接種の施行とその背景、当時に起きた事故などの報告である。  
約 10 分の休憩をはさんでから、後半に下記の 2 題の発表が続けられた。

4. 薬とは何か 日本薬史学会 遠藤 次郎  
東京理科大学薬学部教授をこのたび停年退職された遠藤次郎本会評議員による報告である。東洋医学の面からの「薬」の分類について解説された。「服薬」「上薬・中薬・下薬」などの用語に加え、その背景となる資料や文献、用語などにも話が広がった。病院や薬局での日常の調剤や販売の中における「医薬品」とは異なった視点での「薬」を知ることができる報告であった。

質疑応答で真柳誠本会評議員から、いわゆる西洋薬とのスタンスの違いについての質問があった。  
5. 日本在来馬と西洋馬—日欧獣医学交流史と関連して 日本獣医史学会 小佐々 学  
日本における馬の歴史である。現在テレビや映画でみる「サラブレッド」とは異なる本来の日本産の馬に関する報告である。去勢や馬具に関しても興味深い報告があった。

発表会終了後、参加者は順天堂大学付属院内内のレストランヒルトップに移り懇親会が行われた。  
17:40 開始。司会進行は獣医史学会の藤原弘先生であった。(参加費は 6000 円)  
席上、日本歯科医史学会理事長であられた谷津三雄先生が本年 8 月に他界されたことが、現同会理事長の渋谷鉦先生から報告された。そこで乾杯ではなく、故谷津先生への献杯を行って会の始まりとなった。  
各史学会から 1 名ずつのあいさつがあり、薬史学会からは末廣理事がスピーチを行った。  
料理もふんだんにあり、ビール、ワインも多くの栓があげられた。発表会場に負けず劣らない盛会となった。19 時散会。

## ◆北海道支部だより

### 支部発足 5 周年の記念事業について

日本薬史学会北海道支部(事務局)

#### はじめに

昨年秋、日本薬史学会(当会)の北海道支部(当支部)は満 5 歳を迎えました。節目を迎えるに当って当支部は「支部発足 5 周年」の記念事業を計画し、2009 年 11 月 14 日に記念祝典を開催しました。生憎の悪天候にも関わらず多くの関係者が出席し、盛会裡に終わることができたと思います。概要を報告します。

#### 支部発足の経緯

当支部発足の発端は、2004 年春、当会から北海道薬剤師会(道薬)に「2005 年会開催の要請」があったことに遡ります。当時、北海道在住の当会会員は僅か 9 名、仲間との交流の場(支部)が欲しいとの夢

を持ち続けてきましたが、そんな状況に年会要請の話しが舞い込んだのです。即座に「先ず支部創り、次に年会開催に協力」との結論に達したのは云う迄もありません。いったん「支部設立期成会」を立ち上げ、2004年11月16日、当支部が誕生しました。翌年、支部の会員は一挙に30数名に膨張しましたが、これは当時の道薬会長の大森 章先生、同副会長の東洋宏彰先生のご尽力のお陰、御恩は忘れられません。

## 記念事業

支部発足5周年の記念事業として「記念式典」、「記念講演会」及び「懇親会」を開催すると共に『支部発足5年間の歩み』なる記念誌を発刊しました。

### ① 記念式典(14:00～14:30、札幌市教育文化会館)

齋藤元護支部長の「御礼のことば」に引き続き、誕生から今に至るまで当支部がお世話になった3団体の3先生から「御祝辞」を頂戴しました。山川浩司先生(当会会長)、竹内伸仁先生(北海道薬剤師会副会長、東洋彰宏会長の代理)、そして、長瀬清先生(北海道医史学研究会会長)です。式典には多数の祝電が寄せられ、有難いことと感謝しております。

### ② 記念講演会(15:00～16:30、札幌市教育文化会館)

当会会長の山川浩司先生による「日本の薬学、薬剤師教育の150年—過去・現代・未来—」なるご講演を拝聴できました。日本の薬学が背負ってきた歴史が現在の薬学教育の根底にあり、6年制薬学教育に繋がっていることが理解でき、重厚な内容と山川先生の熱情が伝わってくる名講演でした。なお、この記念講演会にはファイザー社からご後援を頂きました。

### ③ 懇親会(17:00～19:00、北海道厚生年金会館)

会場を教育文化会館の直ぐ隣にある北海道厚生年金会館に移して開宴。齋藤支部長、山川会長のご挨拶に続いて、島田保久先生(北海道医史学研究会代表幹事)の祝杯の音頭でスタート。途中、大和田榮治先生(北海道薬科大学学長)のスピーチを挟んで、2時間フルの楽しい一時を過ごしました。

### ④ 記念誌の発刊

学会・学校・企業史など記念誌の発刊は、起点(設立年)から10年を最初とするのが普通ですが、「20年史」、「30年史」が最初となる例も少なくありません。当支部の「5年史」の発刊は、むしろ極めて珍しい例です。当支部の活動状況や成果は未だ微小ですが、「5年史」の編纂を通じて、その意味、価値、重要性などを感じ取ることができた点で、大変良い経験になりました。その体験は、次の「10年史」の編纂に必ず役立つことでしょう。

5周年記念誌のタイトルは、『支部発足5年間の歩み—平成16年11月～平成21年11月—』で、記載事項は以下の通りです。①祝辞、②記念講演の要旨、③支部前史、④支部発足後5年間、⑤道内の薬史研究者、⑥道内薬学教育機関の興亡、⑦つどい欄(薬剤師職能12組織の沿革その他の紹介)、⑧資料編(年表、会則、会員名、役員)。

冊子のサイズはA5版、2段編成の57頁。

## おわりに

当支部の発足後5年間の諸活動を振り返ると共に、未来志向の記事も含めて冊子にまとめました。駆け足で来た5年間はルール敷きの時代でしたが、これからは、当支部の特色ある研究を打ち立て、成果を薬剤師職能に生かすようにしたいものと、思っております。

## 謝辞

記念事業の遂行に当り、当会の山川浩司会長を始め大勢の方のご助力、ご協力を頂きました。ご挨拶やスピーチ、記念誌へのご寄稿・写真提供など、なかでも「つどい欄」(記念誌)への原稿の作成ではか

なりの時間を要したはず、ありがとうございました。また、多大のご後援を頂いたファイザー社様にも心から御礼申し上げます。

### 【新書紹介】

岩間眞知子著 「茶の医薬史」—中国と日本—

思文閣出版、2009年3月刊、9,000円

美術史研究者としてスタートした著者はふとしたきっかけで、お茶(茶道)の先生とのめぐりあいからお茶の歴史の研究の道に入られた。本書巻頭に「茶は薬として始まった」“Tea began as medicine”と岡倉天心の「茶の本」の書き起こしの言葉と栄西禅師の「茶は養生の仙薬なり、延齢の妙術なり」と「喫茶養生記」(再治本)の最初の一節を引用しているように、今日茶の起源である中国の医薬書(本草書)を綿密にかつ精力的に信頼できる史料を調査されて、「神農本草經集注(本草集注)」序録に、「好眠」の治療薬「茶茗」としての記述を発見して、茶茗を読み解くことから研究は次のステップに進み中国と日本の史料を漏れなく調査された成果には深く頭が下がる思いであった。

(末廣 雅也)

佐藤健太郎著 「医薬品クライシス—78兆円市場の激震」

新潮新書、207頁、2010年1月刊、700円(新潮社)

新潮新書として新刊された。本書の帯に「2010年、もう新薬はうまれない」として注目を引く。著者は東工大修士修了後に製薬企業の研究員として抗ガン薬の開発にあたり、現在は東大大学院理学研究科の広報担当の助教で、サイエンスライターとして健筆をふるっている。

本書は1章 薬の効果は奇跡に近い、2章 創薬というギャンブル、3章 全ての医薬は欠陥である、4章 常識の通用しない78兆円市場、5章 迫り来る2010年問題、6章 製薬会社の終わらない使命、に分かりやすく論述されている。

この新書は体験から記述されているので理解しやすい。評者はかつて有機化合物の構造活性相関の面から、山川、金岡、岩澤著「メディシナルケミストリー」(講談社)を第五版まで25年ほど教育界に送ってきた。このドラッグデザインの方法による医薬品の開発は成功を収め、20世紀末までに多数の医薬品が開発されて世界で78兆円産業となった(日本の医薬品産業は7兆円強)。今はガンやリュウマチなどの難病が残されている。この時代になってきた事情をこの選書から読み取ることが出来る。

日本の薬学研究教育者には創薬の体験を持たずに「創薬」を謳歌すること人々が多い。2010年代に入った現在、新薬が生まれ難い厳しい局面に当面している医薬品産業を展望した新書である。

(山川浩司)